

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## A Study of "tsubutsubu to" in the Genji-Monogatari

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yoshikai, Naoto メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000651">https://doi.org/10.57529/00000651</a>

# 『源氏物語』「つぶつぶと」考

吉海直人

## はじめに

かつて伊井春樹編『源氏物語の鑑賞と基礎知識23夕霧』（至文堂）の分担執筆を担当したことがある。その中の「つぶつぶと泣きたまふ」（130頁）について、基本用語として以下のように解説した。

「つぶつぶと」は不思議な語である。上代には用例がみとめられないので、平安朝語と認定されるが、実に多様な用法がある。最も一般的な用法は、源氏の目に「いと白う

をかしげにつぶつぶと肥えて」（空蟬巻）映った軒端の萩や、夕霧の目に「いとよく肥えてつぶつぶとをかしげなる胸」（横笛巻）と映った雲居の雁の豊満さを表した例である。玉鬘の場合は「手つきのつぶつぶと肥えたまへる」（胡蝶巻）とあり、体ではなく手が肥っていた。これらは「まるまる」と訳するのが適当であろう。

また「つぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書きて」（橋姫巻）は、字がぼつぼつと書かれている様である。ただし浮舟にあてた薫の「かくつぶつぶと書きたまへる」（手紙は、むしろ「詳細に」と訳す方がよさそうである。その他、「胸

つぶつぶと走るに」(蜻蛉日記)は、「胸走る」に「つぶつぶと」が挿入されたものであろう。

これが涙と結びついた「涙のつぶつぶと落ち給ふ」(うつほ物語・楼上上巻)は、粒のような涙が「ぼたぼたと」落ちるとなり、「つぶつぶと泣きたまふ」は、「ほろほると」泣く意になる。松尾聡氏「中古語」「つぶつぶと」の語意

国語展望41・昭和五十年十一月参照。

(131頁)

その時はこれで納得していたのだが、後になってこの説明では、『源氏物語』の特殊用法に言及していないことに気付いたので、改めてここで論じてみることにした。

## 一、辞書の説明

空蟬巻の垣間見場面で、源氏は空蟬と碁を打っている軒端菰の容姿を見て、

いと白うをかしげにつぶつぶと肥えてそぞろかなる人の、

(空蟬巻120頁)

と述べている。これが『源氏物語』における「つぶつぶと」の最初の用例である。ここに見えている「つぶつぶと」は、比喩的な意味として使われており、ふつくらしした(ぼちゃっとした)

という訳でよさそうである(肉感的なイメージもある)。

ではこれは、美的形容ととらえていいのだろうか。というのも源氏は、必ずしも軒端の菰に惹かれてはいないからである。それは続く「そぞろか」(背が高い)にしても、女性としては必ずしも褒め言葉ではなさそうである。<sup>[1]</sup>

はたしてこの意味は、「つぶつぶと」の一般的な用法なのだろうか。それとも『源氏物語』独自の特殊用法なのだろうか。そのことを「つぶつぶと」の用例の検討を通して考えてみたい。なお『源氏物語』の本文は、小学館新編日本古典文学全集から引用する。

まずは辞書の説明に耳を傾けてみよう。最初に小学館の『日本国語大辞典』で「つぶつぶ」を引くと、副詞として大きく四つの意味が掲出されていた。

(一)「粒粒」の意か)物が粒状であるさまを表わす語。

(1)文字をすらすらと書き続けないうで、はなち書きに書きさ  
まを表わす語。ほつぽつ。

(例として『源氏物語』橋姫巻・夢浮橋巻の用例があげられてい

る) (2)涙、血、水などが粒のようになって流れ出るさまを表わす語。ぼたぼた。

(例として) 『うつほ物語』 楼上上巻・『源氏物語』 夕霧巻・『狭衣物語』・『宇治拾遺物語』 などがあげられている)

(3) 粒状でころころしているさま、また、一面に粒状のものが付いているさまや、粒状のものが入っているさまを表す語。ほつほつ。ぶつぶつ。

(例として) あがっているのは近世以降)

(二) 「円円」の意か。「つぶら」と関係あるか) まるまると肥えているさま、ふつくらとしているさまを表わす語。

(例として) 『源氏物語』 横笛巻・『夜の寢覚』 があげられている)

(三) 「つぶさ・つばら」と関係あるか)

(1) こまこまとくわしいさまを表わす語。つまびらか。

(例として) 『蜻蛉日記』・『源氏物語』 少女巻・『名語記』 などがあげられている)

(2) すっかり完全なさまを表わす語。

(例として) 『今昔物語集』 三一一一〇・『十訓抄』 があげられている)

(四) その音から)

(1) 胸さわぎなどのするさま、思いがたまつて胸がどきどきするさまを表わす語。どきどき。

(例として) 『蜻蛉日記』・『源氏物語』 若菜下巻・『狭衣物語』 があげられている)

(2) 針などを無造作に刺すさまを表わす語。ぶつぶつ。

(例として) 『うつほ物語』 俊蔭巻があげられている)

(3) 物などを無造作に切るさまを表わす語。ぶつぶつ。

(例として) 『今昔物語集』 二一〇—三四があげられている)

(4) 煮物の煮えたつ音を表わす語。

(例として) 『徒然草』 などがあげられている)

(5) 口の中でぶつぶつ言うこと。経文を唱えたり、不平を言ったりするさまを表わす語。ぶつぶつ。

(例として) 『有明の別』 などがあげられている)

これを見て、上代の用例が掲出されていないことから、「つぶつぶと」は平安朝語だという予測がつく。前掲空蟬巻の用例は、このうちの(二)「ふつくらとしているさま」であろう。例示されているのが『源氏物語』と『夜の寢覚』の例であるから、『源氏物語』が初出であるとすれば、特殊用法である可能性が高くなる。

参考までに他の辞書も見ておきたい。角川書店『古語大辞典』を見ると、

Ⅳ水中を歩く音の形容。じゃぶじゃぶ。「此の盗人は、其の

盜たる馬に乗て、…痛くも不走して、水をつふくくと歩ばして行けるに」(今昔二五—三七)

は(四)の範疇であろうが、『日本国語大辞典』には出ていない用法である。『今昔物語集』においても、用法の広がりが認められそうである。

もう一つ、『第五版全訳読解古語辞典』(三省堂)の説を紹介しておきたい。「読解のために」で「たつぷりとした様子を表すつぶつぷ」として、

上代の用例がなく、中古にもそれほど多くの用例がないので、わかりにくい語。中古の用例の多くは、①から④までで、「まるまると・完全に・たつぷりと・残りなくこまごまと」などの範囲で解けて、「ぼつりぼつり」の意はなさそうとする説が妥当。④の例は「つぶつぷと鳴る」の形が多く、現代語の「どきどき」に近い語の感情表現になるが、この場合も思いが胸のうちにたつぷりとあふれるようになるから、「つぶつぷと鳴る」わけである。なお、「つぶさ(具さ)」「つぶら(円ら)」などの語も同系と考えられる。

とまとめられており、大変参考になったからである。全体としては、大きく「粒・円あるいはつぶら・つぶさ」語源系と擬態語系に二分されそうである。特に擬態語の場合は汎

用性があるらしく、「どきどき・ぶつぷつ・ぶつぷつ・ぶつぷつ・じゃぶじゃぶ」など複数の擬音が含まれており、そのために意味が広がっているであろう。

## 二、「つぶつぷ」の用例

参考までに、「つぶつぷ」の用例を調査してみた。これに関しては、既に松尾聡氏の調査結果があるので、それを利用させていただく。

- うつほ物語四例 蜻蛉日記三例 落窪物語三例 藤原実方集一例 源氏物語十三例 紫式部日記一例 浜松中納言物語一例 夜の寝覚五例 狭衣物語三例 栄花物語一例 今昔物語集三例 とりかへばや物語一例 有明の別れ七例 古今著聞集一例 十訓抄一例 宇治拾遺物語三例 吉野拾遺一例 徒然草一例

松尾氏は広く用例を求められ、中古・中世の作品から合計五十三例をあげておられる。このうちでもっとも用例が多いのはやはり『源氏物語』であった。それを巻別にあげると、

- 空蟬巻・葵巻・少女巻・胡蝶巻・野分巻・若菜下巻・柏木巻・横笛巻二例・夕霧巻・橘姫巻・総角巻・夢浮橋巻

となる。横笛巻だけ二例あるが、これといった偏りは認められない。また『有明の別れ』の七例も用例が多いといってよさそうである。

次に松尾氏は、これらの用例をAからMまでの十三種（『日本国語大辞典』は十一種）の意味に細分され、それぞれに用例をあてはめておられる。その概要を示すと、

- A 「つぶつぶと肥ゆ」の類 源氏物語以下十一例
  - B 「つぶつぶと泣く」「涙つぶつぶと落つ」などの類 うつほ物語以下六例
  - C 「つぶつぶと言ふ（語る・聞ゆ）」の類 落窪物語以下九例
  - D 「つぶつぶと言ひ続く」「つぶつぶと聞えおく」などの類 蜻蛉日記以下の四例
  - E 「つぶつぶと聞く」 有明の別れの一例
  - F 「つぶつぶと書く」の類 源氏物語以下の三例
  - G 「つぶつぶと心得」 源氏物語の一例
  - H 「つぶつぶと読む」の類 有明の別れの三例
  - I 「胸つぶつぶと鳴る」などの類 蜻蛉日記以下の六例
- \* 徒然草の「つぶつぶと鳴るを聞き」は豆を煮る音なので除外
- J 「つぶつぶと縫ひつく」 うつほ物語の一例（孤例）

- K 「汗（血）つぶつぶと出づ」の類 有明の別れ以下の二例
- L 「つぶつぶと切る」 今昔物語集以下の二例<sup>3)</sup>
- M 「水をつぶつぶと歩ばす」 今昔物語集の一例

\* 吉野拾遺の「つぶつぶと水の底に沈みける」は「づぶづぶ（ずぶずぶ）」なので除外

となる。これを初出の年代で分類すると、『源氏物語』以前の用例があるのは、

- B（六例）・CD（四例）・I（一例）・J（一例）
- であり、『うつほ物語』『落窪物語』『蜻蛉日記』あたりが出发点ということになりそうだ。次に『源氏物語』から用いられているのが、

A・F・G・

で、これは『源氏物語』の特殊用法（用法拡大）といえそうである。最後が『源氏物語』以後の例で、

E・H・K・L・M

があげられる。これは平安後期以降の新しい用法（EHKは『有明の別れ』が初出、LMは『今昔物語集』が初出）と考えてよからう。このうちのKはBにまとめられそうである。またEHはCDに含めてもいいのではないだろうか。

この分類と用例の分析を踏まえた上で松尾氏は、

中古の諸例はすべてツブラ・ツブサ系の語とみて、「まるまると・完全に・たつぷりと・残りなくこまごまと」などの範囲でなんとか解くのがどうやら穏当であって、少なくとも「ポツリポツリ」の意の存在は、きびしく再検討すべきように感じている。

と結論を述べておられる。これを日本国語大辞典に当てはめると、(一)(2)などは再検討の余地があることになりそうだ。もちろん用法は統一だけでなく拡散も可能なので、新たな意味が付与されたとすることもできなくはない。

### 三、「つぶつぶと泣く」「つぶつぶと言ふ」表現

広がりのある「つぶつぶと」だが、用例が多いのはA十一例・C九例、I七例、B六例である。ただしCとDは一緒にしてもよさそうなので、これを合体させると十三例と最多になる。ここで視点を変えて『源氏物語』以前の用例だけを取り上げて分類してみたい。すると前述のようにBが六例でC Dが四例となる。

Bの例としては『うつほ物語』に、

① 涙をつぶつぶと落として、いたくためらひて、聞こえもや

りたまはねば、

(新編全集国譲上巻130頁)

② いと悲しと思ほして、え念じたまはで、つぶつぶと泣きたまふを、

(国譲中巻221頁)

③ 涙のつぶつぶと落ちたまふを、

(楼の上上巻502頁)

の三例が用いられている。①は実忠が涙を流しているところで、②は袖君が泣いているところ、③は兼雅が涙を落としているところである。次に『蜻蛉日記』には、

④ 若きをのことも「声細やかにて、面瘦せにたる」といふ歌をうたひ出でたるを聞くにも、つぶつぶと涙ぞ落つる。

(新編全集中巻209頁)

があった。これは石山寺詣での帰りに船中で俗謡を聞いた道綱母が涙を流しているのだが、そんなに大量の涙でなくてもよさそうだ。また『落窪物語』には、

⑤ 女いらへもせで、つぶつぶと泣きぬ。

(新編全集86頁)

が用いられていた。⑤は落窪姫君が泣いているところだが、現代語訳には「しくしくと」とあった。これらは「泣く」あるいは「涙落とす」とともに使われており、固定化されていた表現と思われる。

それが『源氏物語』においても、

⑥ つぶつぶと泣きたまふ。

(夕霧巻436頁)

と踏襲されている。これは一条御息所が泣いているのだが、現代語訳では「しきりに涙をおこぼしになる」とあった。面白いことにこの用法は、『源氏物語』以後平安後期物語ではまったく用いられておらず、ここで途絶えてしまっている。その泣き方は必ずしも激しいとはいえそうもないのだが、いかがであろうか。

これにKを加えることもできそうだ。松尾氏はあげておられないが、『紫式部集I』三十一番の詞書には、

ふみのうへに、しゅといふ物をつぶつぶとそそきかけて、

なみだのいろなどかきたる人のかへりごとに、

(私家集大成中古I 736頁)

とあり、朱をぼたぼたとかけて紅涙に見せている。これも特殊用法であろう。

次にCDの例として『蜻蛉日記』には、

⑦いかでつぶつぶと言ひ知らするものにもがなと思ひ乱るとき、心づきなき胸うち騒ぎて、もの言はずのみあり。

(上巻115頁)

とある。これは道綱母が胸の内にある不満をなんとかしてつぶさに兼家に言い知らせたいと思っているところである。次に『落窪物語』には、

⑧かたはしよりつぶつぶと語りて、 (236頁)

⑨かたはしより、つぶつぶと聞こえたまへば、 (243頁)

の二例が出ている。⑧は越前守が継母に経緯をこまごまと詳しく話しているところで、⑨は衛門督が中納言に継母の苛めを詳しく述べているところである。両方とも「かたはしより」がついているのは『落窪物語』の特徴であろう。

もう一例は『実方集I』九七番に、

⑩ものをだにいはまの水のつぶつぶといはばやゆかむおもふころの (私家集大成中古I 639頁)

と歌に詠みこまれている。なお『実方集』の例は和歌ということもあってか、「水」との関わりも生じている。これは下って『古今著聞集』六(二六六)の、

雨降れば軒の玉水つぶつぶといはばや物を心ゆくまで

(新潮古典集成上巻326頁)

の本歌ともなっているようだ。<sup>④</sup>また歌ではないが『狭衣物語』の、岩間の水のつぶつぶと聞こえ知らせたまふべきほどだになく、 (新編全集91頁)

にも踏まえられている。<sup>⑤</sup>

こういったCDの用法は、作品の広がりを含めて、「つぶつぶと」の原初的用法と考えられる。当然『源氏物語』にも、



ゆゆしかりしほどのことどもなど聞こえたまふついでにも、かのむげに息も絶えたるやうにおはせしが、ひき返しつづつづとのたまひしことども思し出づるに心憂ければ、

(葵卷44頁)

弁参りて、御消息ども聞こえ伝へて、恨みたまふをことわりなるよしをつづつづと聞こゆれば、答へもしたまはず、

(総角卷26頁)

の二例が用いられている。葵卷の例は葵の上に憑依した六条御息所がしゃべっているところで、総角卷は弁の尼が薫のことをこまごまと大君に言上しているところである。

その他、『狭衣物語』に、

つづつづと聞こえさせまほしき事多かれど、

(194頁)

とあるのは、狭衣が源氏の宮にこまごまと語っているところである。『讀岐典侍日記』にも僧正が崩御前の天皇に、

しのびやかにつづつづと申し聞かせたまふ。

(新編全集418頁)

と死後のことをいい聞かせている。また『栄花物語』にも、

あべいことどもをつづつづと仰せらるるに、

(新編全集469頁)

と出ている。これは一条帝が道長にこまごまと仰せられている

ということである。『有明の別れ』巻三には、

はじめよりのことを、なにとうちいづべしともおほえねど、みだりがはしうつづつづときこ聞ゆるに、(創英社版418頁)

と侍従が中宮に実の父親の秘密を打ち明けている。

以上のようにBCDは各時代を通して用例のある原初的用法としたい。

#### 四、「つづつづと肥ゆ」は『源氏物語』の造語か

次にAについては、既に山口仲美氏が検討され、

こうしてみると、人物の姿態を形容する「つづつづと」も、

これら『源氏物語』の一群の擬態語と同様に、当時一般に存在する「つぶらかなり」「つぶら」などの語から、紫式部が造り出した語ではあるまいか。(中略)『宇津保物語』の「つぶらかなり」の語義・用法は、『源氏物語』の「つづつづと」にきわめて近い。ここから、紫式部が、「つづつづと」といった擬態語を造り出すのは、たやすいことであつたらう。

と述べられている。<sup>6)</sup>

確かに『うつほ物語』国譲下巻の、

(480頁)

まだ五十日にも足りたまはず、いとつぶらかに白く肥えたまへり。上抱きたまひて、「あな小さや。人初めはかくある」

(40頁)

は、小宮の生んだ赤ん坊(五の宮)を抱いた帝の感想である。

「つぶつぶと」が「つぶら」「つぶさ」から派生した語であるとする、紫式部が「つぶらかに」から「つぶつぶと」を造り出したとするのも首肯される。ただし「つぶらかに」の用例を調べてみたところ、『うつほ物語』の一例しか見当たらなかったで、『うつほ物語』の「つぶらかに肥ゆ」にしても特殊表現ということになりそうだ。

この「つぶつぶと肥ゆ」表現については、もう少し詰めることができそうである。というのも『うつほ物語』の用例は帝の皇子という高い身分の赤ん坊に用いられていた。それに対して『源氏物語』では、身分のそう高くない女性三人と、不義の子薫に二例用いられており、必ずしも最上級の美的形容とはいえないでもないからである。あらためて用例を検討してみよう。

1 いと白うをかしげにつぶつぶと肥えてそぞろかなる人の、

(空蟬巻120頁)

2 むつかしと思ひてうつぶしたまへるさま、いみじうなつか

しう、手つきのつぶつぶと肥えたまへる、身なり肌つきの

いとこまやかにうつくしげなるに、なかなかなるもの思ひ添ふ心地したまうて、

(胡蝶巻186頁)

3 抱きとりたまへば、いと心やすくうち笑みて、つぶつぶと肥えて白ううつくし。

(柏木巻322頁)

4 いとよく肥えて、つぶつぶとをかしげなる胸をあけて乳などくくめたまふ。

(横笛巻360頁)

5 二藍の直衣のかぎりを着て、いみじう白う光りうつくしきこと、皇子たちよりもこまかにをかしげにて、つぶつぶと

きよらなり。

(横笛巻364頁)

1は前述した軒端の萩のこと、2は玉鬘のこと、3と5は薫のこと、4は雲居雁のことである。この用法は若い女性と赤ん坊にのみ使われている。赤ん坊は薫(男性)のみだが、5には「肥え」がないのでやや異質かもしれない(「きよら」を修飾するのも異質か)。女性は軒端萩、玉鬘、雲居雁といった二流の女性に使われている(藤壺や紫の上には用いられていない)。これについて山口仲美氏は、

肉付きの良い官能的な美を表す「つぶつぶと」は、平安時代一般に使われていた語ではなく、紫式部の造語ではない

かと思われてくる。

(476頁)

と主張されている。もちろん若い女性の「つぶつぶと」と赤ん

坊のそれを同一視するのはためらわれる。また女性にしても、軒端の萩と雲居雁はストレートに豊満な胸が強調されているのに対して、さすがに玉鬘は手に限定されている。

参考までに、『紫式部日記』の例をあげておこう。

大納言の君は、いとささやかに、小さしといふべきかたなる人の、白うつくしげに、つぶつぶと肥えたるがうはべはいとそびやかに、  
(新編全集188頁)

大納言の君とは源廉子(倫子の姪)のことである。『源氏物語』同様、ここでも身分の低い女房に使われていた。なお「そびやかに」(すらくとして)は本来男性に用いられる言葉である。その点は軒端萩の「そぞろかなる」と共通している。あるいは大納言の君が道長の愛人であることを揶揄しているのかもしれない。そう考えると、女性の身分が低だけでなく、何かしら批判的な含みのある用法といえるかもしれない。山口氏も「三人とも、気品という点では、いささか物足りぬ」(475頁)と述べておられた。

その他、『有明の別れ』にも、

いとよきほどに、つぶつぶとこえたる人の、いとささやかに、ひたひ髪いみじくをかしげにかかりて、  
(創英版262頁)

とある。これは中務卿宮の北の方の様子である。「ささやかに」は『紫式部日記』の引用であろうか。

以上のように「つぶつぶと肥ゆ」は、山口氏が指摘されたように、紫式部の造語と見てよさそうである。面白いことに、『源氏物語』以後「つぶつぶとまろに」という新表現も造られている。特に『夜の寢覚』では、

a つぶつぶとまろに、うつくしう肥えたりし手あたりの、  
(新編全集100頁)

b つぶつぶと丸に、うつくしうおほえて、  
(277頁)

c かたち、身なり、つぶつぶと丸に、うつくしうて、  
(325頁)

と、五例中の三例がそうなっている。もちろん『源氏物語』を引用した、

d つぶつぶと肥えて、色はくまなく白く、  
(203頁)

もあるし、最初の a は大納言が中の君の肉付きのよさを述べたものだが、「肥えて」も併用されている。b は帝が中の君を述べたもの。それに対して c は中の君の姫君を形容したもの、d は中の君の若君を形容したものである。c d ともに母中の君と子供の類似が強調されている。『夜の寢覚』の三例は『源氏物語』を引用しながらも、新たに「つぶつぶとまろに」表現を造り出していることがわかる(「うつくし」も併用)。

五、「つぶつぶと書く」「つぶつぶと心得」も『源氏物語』の造語か

ところで前述のように、「つぶつぶと」はAだけでなくF・Gにしても『源氏物語』からしか用例が見られない表現なので、同じく紫式部の造語と考えられるのではないだろうか。そのことを確認しておきたい。

さまざま悲しきことを、陸奥国紙五六枚に、つぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書いて、  
(橋姫巻164頁)

これは柏木が女三宮にあてて書いた恋文を、後で薫が見る場面である。これについて松尾氏は、「つぶつぶと書く」は浮舟に宛てた薫の手紙、

かくつぶつぶと書きたまへるさまの、紛らはさむ方なきに、さりとして、その人にもあらぬさまを、思ひのほかに見つけられきこえたらんほどの、はしたなさなど思ひ乱れて、いとどはればれしからぬ心は、言ひやるべき方もなし。

(夢浮橋巻392頁)

同様、こまごまと詳しく書いてと解せることを論じておられる。これを「ぼつりぼつり」と解するのは、「あやしき鳥の跡のや

うに」が挿入されているからだとしておられる。もともとこれは柏木が最後の力を振り絞って女三の宮に返事をするところに、御返り、臥しながらうち休みつつ書いたまふ。言の葉のつづきもなう、あやしき鳥の跡のやうにて、  
(柏木巻296頁)

心地のかき乱りくるるやうにしたまふ目押ししほりて、あやしき鳥の跡のやうにかきたまふ。  
(夕霧巻425頁)

とあり、それを見た夕霧の感想にも、  
かく例にもあらぬ鳥の跡のやうなれば、とみにも見解きたまはで、御殿油近う取り寄せて見たまふ。  
(同427頁)

と繰り返されている。これはこまごまと書かれているのではなく、文字そのものがたどたどしと解せそうである。

なお「鳥の跡」のような筆跡で手紙を書いた柏木や一条御息所はその後亡くなっているのので、「鳥の跡」は死期の迫った人の手紙という特殊用法と見ることができ。この「つぶつぶと書く」も特殊表現といえそうだが、用法としては「ぼつりぼつり」と「こまごまと」の二つに分けられる。

もう一つの「つぶつぶと心得」は、  
けしきをつぶつぶと心得たまへど、音もせで出でたまひぬ。

(少女巻39頁)  
 である。これは内大臣が女房達の噂話を聞き、夕霧と雲居雁の関係を詳しく知ってしまった場面なので、「すっかりと・つぶさに」でよさそうである。これらも他に例を見ない『源氏物語』初出の表現なのだが、あまり重要な場面ではないためか、これまで積極的に造語であることは主張されてこなかった。

## 六、「胸つぶつぶと鳴る心地」も『源氏物語』の造語か

最後にⅠは『蜻蛉日記』の、  
 行ひしゐたるほどに、「おはしますおはします」とののし  
 れば、例のごとぞあらむと思ふに、胸つぶつぶと走るに、  
 引き過ぎぬれば、みな人、面をまほりかはしてゐたり。

(中巻24頁)

から用いられている。これは期待して待っている道綱母の邸の前を兼家が前渡り(素通り)した場面である。『蜻蛉日記』に用例があるので『源氏物語』の造語とはいえないのだが、よく見ると『蜻蛉日記』は「胸つぶつぶと走る」となっている(孤立例)。これは「胸走る」と「つぶつぶと」が合体したものである。それに対して『源氏物語』には、

Ⅰはつかに見ゆる御袖口は、さにこそあらめと思ふに、胸つぶつぶと鳴る心地するもうたてであれば、外さまに見やりつ。

(野分巻275頁)

Ⅱ御鏡などあけてまゐらする人は、なほ見たまふ文にこそはと心も知らぬに、小侍従見つけて、昨日の文の色と見るに、いとみじく胸つぶつぶと鳴る心地す。(若菜下巻250頁)

とあって、「胸つぶつぶと鳴る心地す」で統一されている。Ⅰは夕霧が紫の上の気配を感じてときどきしているところで、Ⅱは源氏に柏木の手紙を見つけられて小侍従がときどきしているところである。恋のときめきだけでなく、冷や汗が流れてときどきしている場合にも使われている。これは心音を表すニュアンスが強いようだ。わずかな違いではあるが、「胸つぶつぶと鳴る心地す」は『源氏物語』の造語(独自表現)といってもいいのではないだろうか。

次に『源氏物語』の影響を受けている『浜松中納言物語』の、  
 御胸つぶつぶと鳴る心地せられ給ふ。

(新編全集250頁)

は、中納言の胸が高鳴るところだが、頭注一に「ここはときどきという動機の高鳴りをあらわす擬音語」と説明されている。

『有明の別れ』巻一でも、

上の御胸はそぞろにつつぶつとなる御心地ぞすめる。

とあって、女大將を見ている帝の胸はときめいている。また『有明の別れ』巻三にはもう一例、

ひとかたならず胸つぶつぶとなる心地ぞする。

(創英版394頁)

とある。これは内大臣が対の上(自分の娘)を見て胸がどきどきしているところである。『木幡の時雨』にも、木幡で美しい姫君を垣間見た中納言は、

うちつけに御胸つぶつぶとなる心地して、御涙のほろほろ  
とこぼるるぞせんかたなきや。

(『木幡のしぐれ・風につれなき』笠間書院・13頁)

とあって、定石を踏襲している。もちろんこの涙は悲しみの涙ではない。それに対して『狭衣物語』の、

胸つぶつぶと鳴りつつ、  
(57頁)

は、狭衣が源氏の宮を見て胸が高鳴っているところだが、「心地す」が欠けており、比喩表現ではなくなっている。

なお『徒然草』の、

豆を煮ける音の、つぶつぶと鳴るを聞き給ひければ、

(新編全集137頁)

は、「胸」ではなく豆の煮える音なので、これも新しい擬態語

といえそうだ。

### まとめ

以上、『源氏物語』を中心に、その前後の作品における「つぶつぶと」の用例を総合的に検討してみた。その結果、『源氏物語』ではそれ以前になかった「つぶつぶと肥ゆ」表現を發明し、「ふつくらとした」という意味で用いていたことが明らかになった。これは「つぶつぶと」を美的用法に仕立てたものともいえる、しかしながら形容されている女性が二流の人物なので、やや上品さを欠く二級の美的表現と見ておきたい。

また「胸つぶつぶと鳴る心地」にしても、初出は『蜻蛉日記』であるが、「走る」と「鳴る」の違いを勘案すると、これも『源氏物語』の造語に加えてよさそうである。「つぶつぶと」の用例を多用している『源氏物語』は、それ以前の用法を継承しながらも、新たな用法を工夫・考案しているといえる。

「つぶつぶと」は汎用性の高い擬態語として活用されたことで、その用法に広がりが生じたわけだが、『源氏物語』はそれをうまく物語に利用していたことが明らかになった。

〔注〕

(1) 「そぞろか」の用例は多くない。それにもかかわらず『源氏物語』では濁音「そぞろか」(空蟬巻・柏木巻)と清音「そそろか」(一行幸巻)が併存している。他に「そそろか」は「とりかへばや」に一例、「そぞろか」は「夜の寝覚」『狭衣物語』と「りかへばや」に各一例認められる。そもそも座っている軒端の萩を見て、それで背が高いことが分かるのであろうか。仮に座高が高いのであれば、「そびやか」の仲間というより「お背長」(末摘花巻)の類語になりそうだ。

(2) 松尾聆氏「中古語「つぶつと」の語意」国語展望41・昭和50年11月↓『源氏物語を中心とした語意の紛れ易い中古語攷』(笠間書院)昭和59年10月。松尾氏は五十五例あげておられるが、そのうちの『源氏物語』一例と『狭衣物語』一例は本文に問題があるので対象からはずした。また柿谷雄三氏「かげろふの日記の副詞に関する一考察」論究日本文学11・昭和31年12月でも、『蜻蛉日記』や『源氏物語』などの用例について考察されている。

(3) 『落窪物語』には「一の車とこしばりを、かつつと切りければ」(207頁)という近似した例がある。「つぶつと」と「ふつと」(「ふつと」)は、擬態語としては互換可能ではないだろうか。

(4) 『千五百番歌合』の四八八番に、  
つぶつとのきの玉水かずそひてしのぶにくもるはるさめのそら  
(新編国歌大観)

とあり、その判詞に「つぶつとといへるや、いかにそとときこえ侍れど、いはばやものをそころゆくまでと、鄙曲にうたふ歌も侍れば、をかしくも侍るべし」と、『古今著聞集』第六所収の歌が引用されている。

同二六一九番にも、  
しのぶとものきのたま水つぶつとありしままよのものがたりせよ  
(新編国歌大観)

とある。また『隆房集』一五番にも、

つぶつとといはねばこそあれたま水のあはれいづくにつもるおも  
ひぞ  
(私家集大成中世I 319頁)

と詠まれている。「軒の玉水つぶつと」という表現が定着しているようである。

(5) 倉田実氏「源氏官思慕の独詠歌」大妻女子大学紀要31・平成11年3月では、「つぶつと」の意味を「水が粒のようになって流れでるさま」などではなく、先に引用した「胸はつぶつと鳴り騒げど」と同じように、水がたつぷりあふれて音が高まるさまであり」とした上で、「岩間の水のつぶつと」と高鳴る意に恋情の高まりをよそえ、また「つぶつと聞こえ」でつぶさに言う意にも働いている」と述べておられる。

(6) 山口仲美氏「つぶつと」肥えたまへる人—日本文学32—8・昭和58年8月↓『平安朝の言葉と文体』(風間書房)平成10年6月↓『言葉から迫る平安文学1山口仲美著作集1』(風間書房)平成30年10月  
吉海「基本用語・あやしき鳥の跡」『源氏物語の鑑賞と基礎知識23夕霧』  
(至文堂)平成14年6月では、以下のように解説した。

中国の蒼頡そうごという人が、鳥の足跡を見て文字を發明したという説文の故事による。本来は古今集仮名序の「鳥の跡とどまれば」のように、単に文字の意味で用いられていたが、連綿体の仮名が発達する中で、鳥の足跡のように一字一字がぶつぶつ切れているものを言うようになった。こも御息所が病気で衰弱した身をおして書いたものである。ただし夕霧は必ずしも字のまささを強調しているわけではない。

病床の柏木にも同様に「言の葉のつづきもなう、あやしき鳥の跡のやうにて」(柏木巻)と用いられている。後の「橋姫」巻で弁の尼から薫へ渡された柏木の手紙こそは、まさに「つぶつとあやしき鳥の跡のやう」に書かれたその手紙であった。柏木と御息所の手紙は、ともに臨終直前の人が最後の力を振り絞って書いたという共通性が認め

られる。(以下略)

(101頁)

(8) 吉海「基本用語・胸はしり」『源氏物語の鑑賞と基礎知識23夕霧』(至文堂)平成14年6月では、以下のように解説した。

本来は胸騒ぎがする、胸がどきどきするの意。「人に逢はむつき  
きのなき夜は思ひおきて胸走り火に心焼けをり」(古今集・雑琳・  
小野小町)を引歌としていとすると、恋の火で胸が燃えて寝ら  
れない意となる。ここは落葉の宮ではなく御息所からの手紙であ  
るから、引歌表現と見る必要はないかもしれない。(113頁)

「胸走る」の、用例は『古今集』一〇三〇番・『蜻蛉日記』・『うつほ物  
語』国譲上巻・『落窪物語』・『枕草子』・『源氏物語』・『栄花物語』な  
どに見られる。また「胸つぶる」「胸つぶらはし」「胸鳴る」も類語と  
見ておきたい。